

大陸（北支）

北支鷲兵団歩兵第百十連隊

河南作戦の軽機射手

大阪府 神戸 肇

大正十一年四月二十六日、岡山県勝田郡梶並村真殿、農林業を営む家の六人兄弟の長男として生まれた。家には両親祖母が健在であったので、大阪の藤永田造船所に勤め、溶接工として、船舶、駆逐艦、砲艦などの建造に当たっていた。十七歳ころだったが、長男ではあるが農林業は両親がやっていたので、しばらくは外の空気を吸ってみよう、あるいは都会の生活もしてみたい気持ちがあったのかもしれない。

昭和十六年十二月には大東亜戦争が勃発していたが、私は昭和十七年徴集であるから、国民の義務の一つ兵役につくため徴兵検査があった。その徴兵検査に見事合格し、徴兵官の将校から「甲種合格」と言われ、まず安堵したが、その責任の重大さがひしひしと身にしみてきた。当日合格した者は私たちの地域で三名だった。その日のうちに友達となり度々会っていた。村役場からの伝達では三名共に同じ連隊へ入隊と決まった。入営の当日は周辺に住民の方々と親戚の方はもとより、多くの方たちのお見送りを受けた。私ども三名は村役場前に集合し、村長をはじめ、村議会の方、青年団、在郷軍人が見送りに来られ、梶並神社で見送りの方々と共に御敬意を受け出発した。

岡山の連隊の営門に入ると、衛兵所の前に我々入営

兵を案内する兵数名がおり、引率され兵舎前に整列し点呼を受ける。その日は中隊の班内で睡眠し、翌朝の点呼で隊長の訓示、続いて班長の訓示があり、詳しく話をされた。「私は君たちを北支へ連れて行くために北支から迎えに来た、都築軍曹である。今日より北支方面に行く準備をする」と言われ、そのための訓練と教育が始まった。

三日目、練兵場の片隅に円陣を組んで、北支派遣軍歌の指導を受け、毎日のように歌った。

『暁雲くらく鎖したる 万里の空は今明けて
天日の下、民草が 歡呼し仰ぐ その威容

燦たり 北支派遣軍』

といったような詩であった。

ある日、円陣を組んでの会話の日、班長は突然「君たちは御家族の方々と明日九時から面会がある。皆の家庭には既に連絡してある」とのこと。その面会は入営してからちょうど七日目であった。面会も終わり、いよいよ戦場に行く日も近いと思った。

昭和十七年十二月十三日、第一百師団歩兵第一百連隊に転属し、岡山駅から長崎へ、船で釜山上陸。朝鮮を北上、山海関から北支に入り、河北省易泉の連隊本部より、我々初年兵は第二大隊第六中隊に編入され、雄県地区の警備についた。

兵士としての三カ月間の基礎訓練教育を受けたが、その期間中の二月十一日（紀元節）だった。初年兵は内務実施ということで銃剣等の手入れをしていた朝、班長がやって来て、古参兵たちは広場で銃剣術をやるから、初年兵の中から二、三名出場するようにと勧めがあった。助手の前田兵長が、神部・藤井・内藤の三名が出場するようにと勧められた。早速防具を身に着け木銃を持って班長に引率され中隊の広場に出た。そこにいた古参兵は四、五十名ぐらいだったと思う。班長の指示で輪の中に入ると、手嶋准尉から「これから銃剣術の試合を行うが、この指揮は私が取る」と訓示がある。この試合は勝ち抜き戦であり、最後に勝ち残った者が優勝者である。審判は手嶋准尉であった。私事ながら、内地にいたとき、銃剣術には少しばかり

り自信があつたのと、教育中なので古兵さんたちの名前も階級も知らない。吐はできた。運試しだ、やるしかない、と心に決めて戦つた。勝ち進んで五、六名を倒したと思うとき、同じように勝ち残つた兵がいた。手嶋審判が最後の決勝戦だと指示があり、その古参の方と立ち会うことになつた。

その古参兵の方は防具の下に半袖の剣道の時に着る黒色のシャツを着ていた。なかなかの相手だ、作法どおりの「始め」の号令で試合が始まつたが、「待て」の合図で五分間の休憩、今度は数分で勝負が決定した。それは一瞬のすきに直突、審判は相手の攻勢を取つた。優勝は相手の方でした。私は悔いはなかつた。試合は終わった。

中隊が整列し、試合の結果発表があり、優勝は古兵でした。私は二位ということで、準優勝と発表され賞品が出た。班に持ち帰り内務班で分配をした。これが思い出として心に残っている。

三カ月の一期の教育期間も過ぎ、中隊の大編制替えが行われ、私は植原少尉の率いる第一小隊第一分隊の

軽機関銃手を命ぜられた。その軽機関銃は十一年式というなかなか重い銃である。

初年兵の一期検閲、その後も、班長からも「神部お前は銃剣術が上手だから教えてくれ」ということで毎朝、六時から点呼まで一時間ほど銃剣術である。お陰で生卵二個が余分についた。

私は軽機関銃手として数々の作戦に参加、部落掃討が行われ、相手は共産八路軍であり民心の把握の指示があつた。しきりに叫ばれていた当面の敵軍は蔣介石が率いている正規軍だが、潭錦良が率いている四千人とも五千人とも言う。軍隊並の組織を持つ敵は、土民軍、匪賊であり、先に申した八路軍もいるため終始警戒、撃碎せねばならぬ。我が第二大隊には寸暇もない、激務、戦闘の毎日が続いた。

五月二十八日、軍令陸甲第三十六号に拠り、編制改正下令、六月二十日編制改正完結。それまでは警備で、各村長単位で住民からの報告書が毎日届けられてくる。警備隊は湖の側の望楼に一個小隊ぐらい駐屯し、始終

討伐などしていた。あるいは山西省の大きな山へ行つて、そこには支那事変当時の日本軍の兵器などが錆たまま放置してあり、当時の日本軍が苦戦したことが偲ばれます。

河南作戦、京漢線打通作戦は昭和十九年四月十八日発起、黄河の対岸に敵軍数万の陣地がある。我が軍の第十師団、第十連隊（警第三九一部隊）第二大隊古賀大隊は対岸に陣取り、敵との睨み合いが数カ月間続いていた。その間一番困ったのが水だ。この時くらい水の大切さを知らされたことはない。炊飯に使用する水すら無い。もちろん、朝の顔を洗う水も無い有様だ。それでもなお、銃剣など手入れをして、いつでも出動できる準備していて、心を休める時もない。そのときに、「明朝総攻撃」と命令が下る。準備もよし、攻撃の配備につく。

命令一下、重火器の砲音が一齐に鳴り響き、重機関銃が負けじと火を噴く、重機の弾の中に曳光弾が入っていて飛び交う。照明弾も打ち上げられる。迫撃砲弾がヒュルン、ヒュルンと飛び交う夜空が明るく見える。

そのうち東の空が明るくなる。攻撃はなおも続く。物凄いい戦闘だ。そのとき、歩兵に攻撃命令が下る。

我が軍は敵を撃破しながら追撃する。その凄まじさは筆舌に尽くし難い。なおも、追撃と追跡は続く。道路の両側には敵兵の死体か、味方の死体が識別のつかない無数の死体が転がっており、その中に十体くらい以上の死体が仁王のように膨れ上がり紫色の死体がある。爆鉛か銃弾（ダムダム弾）による鉛害なのか。

日が昇るにつれ激戦の状況が分かってくる。荒野に生臭い風が吹く、最初は息を止めていたが、なおも追跡の行軍は続き、私たち分隊は尖兵小隊の尖兵分隊です。すると初めての空襲、突然西方から爆音が聞こえる。あの飛行機は友軍のものと思いつくりとしていた瞬間、低空で機銃掃射を浴び兵は皆散る。敵機は二機で数回にわたり低空機銃による掃射を行い西方に去っていった。その機銃掃射による我が軍の負傷者は無かったが、軍は昼夜を分けず進み、敵地、敵支配地域に深く入っている様子だった。

我が分隊だけが尖兵として前へ出過ぎ孤立していた。

翌朝九時三十分ころか、横のトーチカから銃弾が左右からも正面からも飛んできた。我々は狙われている。後方に伝令を走らせる。分隊の指揮は斎藤少尉がとり、少尉は日本刀を振り翳しながら「前進、前進」と大声で張り切るが銃弾は容赦なく飛んでくる。

遮蔽物は何一つない。前進しようやく木が六本立ち並ぶ台地に着く。そこは基地で敵の城壁もよく見える。右に三カ所、左に三カ所の敵のトーチカもよく見え、その銃眼も見える。友軍の弾も前に落ちる、日章旗で我々の位置を知らせたいが、敵の目標にもなる。そのため空軍に対し、日の丸を地に広げた。私たちはここが死に場所かと覚悟した。

少尉が「射手準備よいか、先のトーチカを制圧しろ」と命令する。「城壁の敵を撃滅しろ」と叫ぶ。軽機が火を吹く。右、左、正面も、射撃位置を変更しながら撃った。敵の抵抗も激しく攻撃してくる。頭上を友軍と敵軍の重火器の弾が飛び交う。そのとき、私の撃った弾丸は実に二百発以上だったと思う。その数は通常弾薬箱四個全部空になる数だ。軽機の銃身の放

熱筒は熱くなって手では握れない。そのため背負い袋を空にして、それを巻いて銃を持つ。それでも今度は城壁から友軍を撃つて来るので更に射撃を続けるが、弾薬が足りないのです。小銃手の弾を手に入れ、それもほとんど無くなった。

砲弾の交差する響きも静かになった。横の部落に第六中隊は集結し、兵員の点呼と被害を点検したが、中隊の半数の者はいない。我が分隊も半数ぐらいに減少した。残る兵士で分隊、中隊を維持し攻撃に備える。その夜のうちに部隊命令が下る。「第一分隊は明朝払暁を期し、正面岩隈鎮の城壁の一角を占拠せよ」の命令である。なお、出撃に際しては軽装という。

軽装とは「決死隊」という意味と受け取り、軽機関銃に三十発、小銃手五発、手榴弾二個、救命綱一本を携行し分隊は出動した。分隊と言っても赤木兵長以下五名であるが、分隊は城壁下に辿り着き、救命綱を取り出し、素早く、敏速な動作で腰の剣を取り出し、救命綱の端に結び城壁の上部に投げ、綱につかまり一人ずつ登る。全員登り着いて日章旗を立て後方に連絡し

た。「一番乗りだ、一番槍だ」敵は既に逃げて行った。嬉しくて赤木兵長以下、目が潤む。この時の感激は今でも忘れることはできません。

一人が上がれば後は大丈夫と自信はあつたが、城内を見れば頑強に抵抗していた敵兵の姿はなく、住民の影も見えない。ただ、鶏と豚が走り回っているのが印象にあるが、敵ながら引き揚げの見事さよ、である。城内掃討も終わり、この度の戦闘も終わりを告げ、死者の御冥福を祈りながら、次の作戦に備えるため洛陽に集結した。

部隊は損害も多く、編成替えがあり、次の京漢打通作戦に突入した。この作戦は大作戦で、大陸打通戦の発起である。約十二個師団が参加した。西安から西は、重慶方面に向かう第三大隊（天野大隊）の戦果が多きかったと聞いた。伊川という川を渡ると、川の水は少ないが水は美しく澄みきっていた。右側百メートルもあるかと思われる絶壁の岩肌が実に美しかった。洞窟に仏像が美しく彫刻され、光輝く絶壁全体に仏画仏像が刻み込まれ、その美しさに心打たれたものでありま

した。

その他は蒋介石の別荘があつたとか、温泉もあり、左側の小山の上に美しい建物が建てられている。激戦後の一時、しばし安らかな気持ちであつた。部隊は敵に遭遇することもなく、昭和二十年三月二十三日、豫鄂作戦が始まるまで、警備、治安維持、共産軍との戦いなどに明け暮れました。

豫鄂作戦が終わり、二十年八月十四日停戦、九月二日協定締結となるが、停戦と聞いても無条件降服とは言われなかつた。終戦後も共産八路軍が来るというので出動させられ、城壁には正規軍一個分隊と日本軍が一部警備することとなつた。八路軍は日本軍が行くと逃げるので、蒋介石正規軍は日本軍の力を頼っているように思われる。

終戦後一週間ぐらいで連隊旗を焼き、その灰を各中隊に分けられた。第十二軍はこのまま残るといふ風聞はあつたが、結局詔書必謹ということで、武装解除にも応じた。復員のため上海へ行く間、食料は割合あつ

たので、農家へ働きに行くことはなかった。

昭和二十一年三月十八日、復員のため河南省洛陽を出発、南京經由で上海に着く。上海で第十二軍が復員するまで、日赤病院の前にいたが、日赤の人々は苦勞をしていた。四月二十七日、貨物船で上海出航、約一週間後和歌山県田辺港に着く。岸壁に日本の巡査がサーベルを腰に下げて立ち、米兵は肩に銃を掛けて立っていた。その前を通り田辺の兵站に入ったが、入り口に田辺の婦人会の方が少ない日の丸の小旗を振りながら迎えてくれた。今だに懐かしく忘れられない。有り難い兵站に一泊し、検閲を済ませ田辺駅を発つ時も田辺の人は見送ってくれ、心に残り有り難く思っている。田辺から家へ電報を打ったが、京都く姫路く姫新線で帰った自分の方が電報より早く着くことができた。駅を降りたがバスがない。友人がオート三輪で家まで送ってくれたが、家の方は皆変わりはなかった。国破れて山河あり、を実感したが、その後、青年団作り、公民館作りなどをし、故郷の復興に尽くすことができた。

テレパシー

愛知県 伊藤 義雄

—まず入隊までの様子を伺いましょう—

私は昭和五年三月、立田北部尋常高等小学校を卒業して農業に従事して、昭和十二年五月徴兵検査を受けました。当時は戦前で甲種合格者は少なく、三人に一人が甲種合格になるくらいでした。

私は甲種合格になり、検査官は、私に騎兵になってもらいたいと望んでいましたが、私の脚が少し短いので騎兵にはならず、歩兵にされました。当時、村の甲種合格者は全員、津島市の料亭で甲種合格を祝う会が毎年開かれる例になっていましたので、生後二十年を楽しく語ったものでした。

—昭和十二年には蘆溝橋事件が起きていますね—
—そうなんです。七月七日に戦争が始まったのです。

昭和十二年の十二月一日朝鮮平壤の歩兵第七十七連隊